

第13章 地球市民の時代

1992—1994

地球市民の時代、元年

1992年——。前年、40周年という節目を迎えた日本JCにとって、新しい幕開けの年である。年初から、西村予史男会頭（静岡）は「今年は川島偉良直前会頭（岐阜）の掲げたEARTH OUR HOME・ふるさと地球運動の理念を実行に移す年、地球市民の時代元年という新たな気持ちでスタートしよう」と、檄を飛ばしていた。

恒例の京都会議は1月23～26日である。春を思わせる暖かい日差しに恵まれ、全国から総勢2万人のメンバーが集まってきた。

23日早朝、西村会頭ら役員は下鴨神社を参拝し、今年一年のJC運動の成功を祈願した。京都府庁に荒巻禎一知事を表敬訪問した後、記者会見を行なった。西村会頭は「本年は、地球の住民から一歩進み、地球への義務と責任を遂行する地球市民としての考え方が必要と考え、それを実行するため政治やイデオロギーにとらわれない現実的な行動を行ないたい」と語った。

ふるさと地球とは……

26日、新年式典である。西村会頭は所信演説でこう語りかけた。

「皆さん、眼を閉じて“ふるさと”のイメージを思い浮かべてください。次に、地球を思い描いてみてください。……眼を開けてください。ほとんどの皆さんは、別々の物を思い描いたのではないのでしょうか。“ふるさと”のイメージは極めて心情的であり、地球のイメージは極めて物質的です。“ふるさと”は一人ひとりの心の中にあるのに対し、地球は私たちの頭の中にあるということだと思う。“ふるさと地球運動”とは、頭の中にある地球を、一人ひとりの心の中にもって来る運動だと言えます。かけがえのない地球を、“ふるさと”と呼べる“ところ”をもつ運動なのです。

決して“ふるさと地球”は、遠きにありて想うものではありません。私たちは“ふるさと”に対する義務と責任を果たしてこそ、単なる住民ではなく市民になり得るのです。義務と責任を果たさなければ、地球

の市民権は得られません。地球をすっぽりと“ところ”の中に納めてしまう地球市民が一人でも多くなれば、ちょっと素敵な時代、それは地球市民の時代だと思うのです」。

ふるさと地球は遠きにありて想うものではない、とは名言である。このコンセプトは今年度6項目の運動指針に具体化された。①創造力あるまちづくり、②世界への貢献、③地球市民としての意識高揚、④地球的規模の個人運動の実践、⑤JCの自己革新、⑥日本JCはLOMの応援団。

ふるさと地球の詩・絵画・応援歌を公募

「ふるさと地球運動」とは、次代を担う青少年に①地球の現状を伝える、②詩・絵画・応援歌を募集する過程で地球について考えてもらう、③子供たちにも簡単にできる地球を救う方法を広めていく、運動である。地球の詩特別委員会原田信隆委員長（札幌）は、次の一文をJC PRESSに記している。

「私はアメリカ国民ではなく、地球市民として帰還する」

「月へ向かう時は技術者であったが、帰ってきた時はヒューマニストになっていた」

宇宙飛行士たちが宇宙空間へ飛び出し、青く輝く地球を見た時、地球と自分との強い絆を感じ、その感動の瞬間を「地球意識」と呼びました。彼らにとってボーダレス、グローバルという概念は、自らの体験からごく自然になっています。21世紀は、我々すべてが宇宙というフィールドから地球を見つめ直す時代と言えます。そこで今年度は「私たちの地球を考える」をテーマに、次代を担う子供たちが詩を創作することにより、ふるさと地球を想い、ふるさと地球と対話する機会をもってもらい、この青く美しい地球をいつまでも誇りに思えるよう、自分たちも何かしなければならぬという意識を醸成し高揚したいと考えます。

推進グッズ3点セット

この運動がLOM活動の一環として広く行なわれる

ように、推進グッズとしてパンフレットにクレヨンまで添えた「ふるさと地球運動3点セット」を制作した。応募作品は審査選考のうえ、詩からは地球市民の憲章を、絵画からは地球市民の旗を、応援歌からは地球市民の歌をつくり、それらをシンボルとして地球のCIに取り組むことになった。

3点セットの注文が動き始めた。3月25日現在、ブロック単位で4件、LOMで27件、合計4万9150個の発送が完了。具体的な活動報告も入ってきた。

〔長崎ブロック発〕

雲仙普賢岳災害支援として、避難地域の子供達500名を対象に地球（自然）に対する思いや考えを絵にしてもらい、ふるさと地球運動として全国に発信していく。

〔海部津島JC発〕

「ナマズイキイキ運動」（海拔ゼロメートルの当地域を水郷に住むナマズにたとえたJC運動）に連動させて実施した。キーワードは共生。全ての生き物が共に生きることが、人間に残された唯一の明るい未来を築く方法と考える。募集キットを全小中学校3万3000人に配布した。日本JCの運動が、当LOMにとって素晴らしい応援になっていることに感謝の意を表したい。

〔北九州ASPAC発〕

5月24日より4日間、北九州で92年度ASPACが開催された。テーマは「地球にハートが生まれる日」。JCIの会議史上最大という1万8000余の登録を得た。開会式には秋篠宮・同妃両殿下のご臨席を賜り「人と自然が共存、共栄できる未来を求めて、多くの意見交換が行なわれることは意義深い」とのお言葉を頂戴した。会場には「地球の絵画コンテスト」に応募のあった作品2238点が展示された。子供達の描いた地球の姿はバラエティに富み、お国柄が窺える。

西村会頭は「地球への関心喚起が目的」と強調し、イリバロンドJCI会頭は「46カ国でこの意義を強調してきた。力強い手応えを感じている」と述べた。ふるさと地球運動は、国際的にも広がりを見せ始めてき

たのだ。

盛り上がる「ふるさと地球運動」

TOYP大賞

7月24日、東京新高輪プリンスホテル国際館パミールで第6回TOYP大賞セレモニーが開かれた。テーマは「ふるさと地球運動の実践」。受賞者10名の活動が、大型スクリーンに映し出される。最低限の食料さえ手に入れない人達、水さえも不足している地域、教育の場もない……。そんな国が、地球上には数多く存在する。だが他方、地球では自らの青春を捧げ、勇気ある行動を起こしている若者も多いのだ。

グランプリを受賞した上田敏博さんは、4年前に青年海外協力隊員としてフィリピンを訪れ、洗濯板の製作指導と普及に努め、「奇跡の板」として注目された。その後、マニラ市のスモーキーマウンテン地区に住む子供達の生活を知り、支援を決意して同地区に移り住み活動を開始した。上田氏は「受賞の喜びをフィリピンの子供達と分かち合いたい」と語った。

なお、今回は特に1名の少女・坪田愛華ちゃんに特別賞（環境庁長官賞）が贈られた。「一人の力は小さいけれど、一人ひとりの小さな力が重なれば、やがて美しい平和な地球ができる」という思いを得意の漫画で、「地球の秘密」という一冊の本にまとめた。だが、完成して間もなく愛華ちゃんは病のため帰らぬ人となった。12歳の生涯だった。

表彰式に出席したご両親は、「愛華の作品が少しでもお役に立てば嬉しい。本人もきっと喜んでいるでしょう」と語った。この作品は、本年5月ニューヨークで開催された国連子供会議に展示され、6月にリオデジャネイロで開かれた地球環境サミットで配布され、各国の多くの人々に感動を与えた。哀悼。

少年少女国際使節団

7月28日から2週間、夏休みを利用して少年少女国際使節団121名がニュージーランド、オーストラリアを訪問した。この事業は、日本と訪問国の子供達

の「ふるさと地球」を大切に作る心を育み、次世代のリーダーとなるべく国際人の誕生を願う企画だ。子供達はホームステイや本場のラグビーを体験し、記念植樹祭や地球の絵画大会に参加した。

なかでも、絵画大会で見せてくれたニュージーランド・マオリ族の子供達たちの絵は「素晴らしい色彩と大胆な構成で目を見張るばかりだった」、と事務局の報告記にあった。

北方四島の子供達と

8月1～2日に納沙布岬で開かれた第23次北方領土現地視察・現地大会では、根室支庁の招きで来日した北方四島に住む子供達(12～16歳)50名を招待し、交流・対話の場が設営された。ここでも、四島の子供達の作品40点を含む140点の地球の絵画が展示され、交流が図られた。

日中青年友好会議でも

9月13日、訪中ミッションが「日中青年友好会議」出席のため北京を訪れた。国交正常化20周年ということもあり、西村会頭を団長に総勢60名と大規模になった。当会議は「ふるさと地球の絵画展」テーブルカットによって開幕した。

各界代表の挨拶・講演で西村会頭は、「かけがえない地球に夢を描いてゆくために、中国と日本の青年が果たすべき役割は非常に大きなものがある。そのために、両国の友好をもっと深めていく必要がある。素敵な鳥のさえずりを頭で理解しようとする人がいないように、互いに心から好きになること。その気持ち、その感動を地球の隅々にまで広げたい」と語った。そして最後に、サウジアラビアの宇宙飛行士の言葉「最初の1～2日は、みんな自分の国を指していた。3～4日目には自分の大陸を指した。そして5日目、私たちの念頭には、たった一つの地球しかなかった」を引用し、盛大な拍手を浴びた。

子ども星空サミット

10月3日、北海道は七飯町の大沼国際セミナーハウス。「子ども星空サミット」が、「地球の詩92」入選者と函館市近郊の子供達を対象に開催され、様々な

問題を抱える地球に対する子供達の熱いメッセージである詩が紹介された。

宇宙飛行士の毛利衛氏からメッセージが寄せられたほか、国立天文台の池内了教授とアポロ14号で月面着陸したエドガー・ミッチェル氏をゲストに迎え、宇宙から見た地球や地球の未来について語り合った。ある男子が「宇宙人が地球にやってきたら、人間を地球から追い払うのではないかと心配です」と質問すると、ミッチェル氏は「宇宙人はきっと精神文明が発達しているので、優しい心をもっているのではないかと答え、ほっとさせる一幕もあつた。池内教授は「青い地球が茶色になりつつある。一番の問題は森林の伐採で、その大きな原因である紙の消費を減らす努力をしなければならない」と説明した。

会場の子供達からは、いま取り組んでいる空き缶やビンのリサイクル活動の報告があつた。会場でのアンケート調査によれば、今のままでは地球は死んでしまう、と思っている子供達が半数以上もおり、子供達の地球環境への意識の高さに驚かされた。

その後、選考委員代表の今野由梨氏が「今日のこと、そしてこの詩を作ったことを覚えていてほしい。一人ひとりの地球への思いは小さいけれども、それは日本だけではなく世界にも通じること」と述べ、グランプリ4作品を紹介した。「子ども星空サミット」の様子は、10月10日NHKテレビで1時間番組として放映された。

「地球の応援歌」コンテスト

10月18日、東京新宿ルミネアクトホールで「地球の応援歌」コンテスト入賞作の中の23曲が、応募者本人の歌唱・演奏によって披露された。750点の応募曲から選ばれた作品で、一般への発表の場としてコンサート開催の運びとなった。

最後の発表は、グランプリ曲「FOR THE EARTH」。作詞・森ユキさん、作曲・坂本祐介さんがオリジナル曲を披露。歌の後半に入るや、銀賞に輝いた京都のちびっこ達も壇上に姿を現わして合唱、花を添えた。演奏終了後、この曲をCD発売するピンク・サ

ファイアが登場し、アレンジを変えたグランプリ曲を含む数曲の熱唱だ。

5時間に及ぶコンサートの締めは、JC 役員と出演者全員が登場しグランプリ曲を全員笑顔の大合唱となった。会場は、地球に対し何か自分でやれることがあるに違いない、という優しい思いに包まれてゆく……。感動のフィナーレであった。小原嘉文副会頭（佐賀）は、こう語った。「この事業を通じて地球に対する認識を深めて頂き、地球市民としての意識が広がってくれば、と思います」。

日本 JC、地球サミット公認 NGO に

3月3日、日本 JC に朗報が飛び込んできた。国連環境開発会議 UNCED 事務局発「参加 NGO として認定する」との電報だ。昨年の JCI 世界会議で決議された「世界青年環境会議開催」の案件は、より重みを増して実現の運びとなった。岡田伸浩副会頭（横浜）は「JC が提唱している地球市民の理念を全世界に訴える絶好の機会」と語った。

3月6日、経団連ホールで開かれた地球環境日本委員会（地球サミットへの提言をまとめる日本側の代表団体）主催のフォーラムで西村会頭は、「地球市民という理念を世界中の人々がもつことが大切だ。地球への義務を果たして、はじめて地球から豊かさを享受できる。我々は子供達にもこういう意識をもってもらうため、地球の絵画コンテスト等の企画を実施し、その最優秀作品をモチーフに地球の旗やシンボルマークができれば素晴らしい」と提言、会場から盛んな拍手を得た。



日本 JC 地球サミットの公認 NGO に決定（'92）

世界青年環境会議に参加

さて6月2日、リオ郊外の地中海クラブで開かれた世界青年環境会議は、まず議長にイリパロンド JCI 会頭、副議長に西村日本 JC 会頭が指名され議事が進行した。3日間の討議を終え、会議は地球市民憲章や環境問題に対する JCI や NOM、LOM のアクションプランを採択した後、UNCED の決議を政府が遵守するよう督促する決議案を採択した。更に、この実り多い会議を単発に終わらせることなく、今後とも連絡を取り合う国際組織の設立を小原副会頭が提案し、満場一致で可決され、代表には小原副会頭が就任した。

小原副会頭は「環境の専門家も出席し、非常に内容の濃い会議だった。先進国と途上国の対立よりも、共存の可能性を探る方向に重点が置かれ実務的な会議だった。今後、JC メンバー全員が1年に1本の植樹をするなどの目標を具体化していきたい」と語った。

リオと日本を HOTFAX で結ぶ

この会議には、欠かせない余話が一題ある。HOTFAX だ。リオと日本を FAX で結び、情報を共有しつつことを進行させた。12時間という時差の関係で、担当者の苦労は想像に絶するものがあったと思う。リオから日本向けに発信した環境アンケートに対し 334 通、2 回目 236 通の回答があった。754 LOM の 3、4 割以上が参加したことになる。各国代表からも驚嘆の眼で見られ、回答のコピーを要求する代表すらあった。担当の榎畑直尚国際室長（和歌山）は、「皆さんがリオに居るような臨場感を、と頑張りました。多数の回答有難うございました」と日本側の協力に感謝していた。

グローバル・トレーニング・スクール新たに登場

これまでの洋上スクールに代わって、今年度からは新たにグローバル・トレーニング・スクール（GTS）を実施することになった。本年度の基本方針である

「世界への貢献」「地球市民意識の高揚」「地球規模の個人運動の実践」を達成するため、地球市民としての自覚をもった人材育成を図る企画だ。

GTSの目的は、従来の見る・聞くという受動的な基礎トレーニングに加え、環境問題や人権問題を抱えている地域や、被災を受け復興が進展していない地域において、自ら奉仕活動を実践することにより現地民と触れ合い、その体験を通じて地球市民として行動できる人材育成を図ることにある。テーマは「自ら挑戦 ふるさと地球のつくりかえ かいた汗は嘘をつかない」。

フィリピンで3事業(研修)

4月20～26日、山本博史副会頭(大阪)を団長に484名がフィリピンに向かい、次の3事業(研修)を行なった。

①公衆衛生システムの作成。ピナツポ火山噴火により、家を無くした現地住民(アエタ族)に対し、フィリピンJC等との共同事業でトイレを作り、感染症予防や衛生観念の向上を図ると共に、参加者には地球市民としての意識を植え付けた。この時期は乾季のピークで、日中は35度以上にもなり、現地人ですら木陰で休むという炎天下、しかもシッカロールのような火山灰にまみれての作業だった。

②マングローブ植林事業。ピナツポ火山噴火は、同地域のマングローブを含む熱帯森林にも大きな被害を与え、深刻な環境問題を引き起こしている。この植林事業を通し、身をもって地球環境問題を感じ



GTS子どもとのふれあい(フィリピン'92)

取り、「地球規模の個人運動の実践」、「世界への貢献」を考える研修だった。マングローブの植林は、干潮時でなければできないという制約があり、メンバーは繁殖するクラゲに刺されるのも忘れ、心を込めて1本ずつ植樹していった。

③総合研修。地球市民意識の高揚と各人の資質向上のために、外部講師(戸井十月、上田敏博、喜田寛、澤木孝夫、外崎玄の各氏)による研修と、研修室各委員会による研修を実施。

GTS運営委員会山口齊委員長(浦和)は、「全参加メンバーが研修を終了し、全員無事に帰国できたことにより、所期の目的は十分に果たせたと考えます。各方面にひとかたならぬお世話をかけましたが、特にSCJ(セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)の上田敏博氏とケソンJCのブッチ理事長との出会いが、この事業を成功に導いたものと思います」と総括していた。

青年経済人会議、 政治改革推進を緊急提言

7月25～26日、第15回青年経済人会議が開催された。連日30度を越す猛暑の中、東京新高輪プリンスホテル国際館パミールに約7000人(登録)が集まり議論をたたかわした。テーマは「地球市民としての国際貢献を通して、ちょっと素敵な“ふるさと地球”を創る」。

来賓として迎えられた石川六郎・日商会頭(第9代日本JC会頭)は、「真の日本を創り上げるには青年の力が必要だ。地球市民という意識をもってグローバルに活躍してほしい」、そして「戦後、政治の舞台が変わったのだから憲法も変わって当然だ」と、JCの政治改革運動を支援する言葉を述べた。

その後、アクションプランが発表された。JC政治討論会の推進、2010年の連邦国家に向けて自立生活圏を考えよう、エコを核として考えよう……。そして、緊急提言の発表である。「政治に不満を感じている今こそ政治改革に取り組むべきである」とし、次

の発議がなされた。①政治改革の必要性と方法について地域での議論を活性化しよう。②政治改革におけるボランティア活動をJCが積極的に応援しよう。③クリーン選挙の実践を目指し、政治改革を積極的に推進する政治家をJCが公表しよう。

この会議に併せて、国づくりデザインフォーラムが開催された。本年発足した「国づくりデザイン会議」は、通常の単年度事業ではなく3年間の継続事業としてスタートした。政治、経済、学術など各方面で活躍される42名の方々(内JCメンバーは3名)が参加しており、JCの枠を越えた外部組織として今後各LOMおよびブロックでの活動を応援していく。その第一歩として約2時間にわたる会議がもたれた。今後の地域活動の起爆剤として、大きな期待が寄せられている。

国境なき奉仕団、人的貢献に出動

1992年からスタートした運動で、もう一つ大書しておきたいのが「国境なき奉仕団」である。日本JCのメンバーを中心に、民間の国際緊急災害援助活動を目的として企画された国際貢献だ。この活動には、実に感動させられる。よくぞ、やったりと思う。

国境なき奉仕団特別委員会梅澤重雄委員長(甲府)は、次のように記している。「開発途上国において緊急災害発生の際、人的・物的貢献を目的としたもので、政府と連携した民間の国際緊急援助組織である。その基本理念は単なる慈善ではない。人類愛による人道上の配慮からくるもので、困っている国や人が必要とする援助を行なえる奉仕の精神をもった人材をつくることと、社会人が気軽に奉仕活動を行なえる社会システムづくりを目指す。そのために、JCメンバーが地球市民としての自覚をもって行動しなければならない」と。

彼らは、かっこよく抱負を語るだけではない。既に前年12月10日、10名のメンバーがタイの難民キャンプ地での実態調査と、バングラディッシュにおけるNGOの活動状況視察のために出発していた。人的



国境なき奉仕団スタディツアー('92)

貢献とは全く初めての試みだけに、まず自分たちの目で被災地を見聞し、現地側の要求とはどんなことなのか、具体的な活動としては何ができるのかを、把握しなければならないと考えたのだ。

年明け2月にはインド、マレーシア、3月にはカンボジアへと調査団を派遣した。

ミャンマー難民救済

そうした事前調査の手順を踏んだ上で、いよいよ第1陣がバングラディッシュに飛び立つことになるのだが、その2週間前には長野県の青年海外協力隊駒ヶ根訓練所において3日間の国内研修を受講した。研修には青年海外協力隊のOB・OGと梅沢委員長、窪田雅則駒ヶ根JC理事長はじめ200余名のJCメンバー、それに全国から集まった約60名の一般研修生が参加した。

研修内容は、開発途上国の現状説明に始まり、NGOによる海外援助活動のあり方等の講義を受けた後、野外トレーニングについて駒ヶ根JCメンバーから、テントの張り方や飯の炊き方など基本的な野営方法を教わった。

5月6日、「国境なき奉仕団」第1班団長山本博史副会頭はじめ7名が成田を出発。第2班5名は7日、名古屋を発った。今回の行動は昨年3月よりバングラディッシュに大量流出しつつあるミャンマー難民救済が目的で、生活必需物資を現地調達し配布することにより、主に子供達の生命を確保する目的だ。

7日、バンコク経由でダッカ到着。直ちにダッカ子

供病院を訪ね、日本から持参した注射針1万本を寄付。一路、チッタゴンへ向かい、同地で山田一功総括幹事ら4名が救援物資を調達。山本副会頭、梅沢委員長は日本国名誉領事ミハメッド・ヌルル・イスラム氏を訪ね、今後の対応策等について面談した。その後、一行は物資を満載したトラック2台とワゴン車1台に分乗しコックスバザールへ。

翌朝、遅れて到着した第2班と合流し、難民キャンプ地に向かった。現地ではボランティア団体・赤心月社と共に、粉ミルク2.5トン、衣類7500枚、ランタン2400個、モスキートネット1500枚を、少しでも多くの子供の命が救えるよう願いつつ、難民に手渡していった。物資調達資金は、日本JCの国際協力資金より拠出され800万円が充当された。一行は、14日までに無事帰国した。

インド多目的小学校建設へ

次いで、インドで多目的小学校の建設に協力することになった。マハラシュトラ州タレヤルカーン首相からも強力な要請があった事業だ。この学校は子供達の教育だけでなく婦人教育、職業訓練など幅広い分野での教育を行なう学校で、地域の発展に大きく役立つ事業と考えられるため、現地NGOと協力して推進することになった。

建設資材の発注や運搬・輸送も現地手配を原則とし、また建設開始から終了までのあらゆる監視ならびにチェックはKNSSおよびNIRID(NGO)が行なうこととした。本事業は本年8月に開始し、来年3月までに終了する予定で同地域185カ村の約20村に1校の割合で、全10校の建設を同時に開始する。同事業は、失業救済に大きく役立つものと期待されている。

第1次隊は9月3～10日、現地視察を行なった。「国境なき奉仕団」黒川勲副委員長を隊長とし、日本ハンガープロジェクト有川聡氏をアドバイザーにメンバーおよび隊員6名、合計8名が参加した。

4日、現地に到着した一行は市内スラムまちを視察。5日、ボンベイで現地子供達に贈呈する文房具(鉛筆1万本、ノート3000冊)を購入。6日、早朝

よりバスにて100キロ離れた建設予定地などを視察。道路混雑のためホテル到着は夜11時過ぎ。参加者はクーラーなしのバスに長時間揺られてダウン。7日、州首相に会見。インド中央政府に今回の目的を説明し、青年海外協力隊の派遣を要請する。NGO関係者委員会の席上、現金の贈呈式と契約書にサインをもらうことができた。

山田総括幹事は、JC PRESSに次のよう記している。「私たちのプロジェクトも日本で計画したようには進んでおらず、本当に来年3月までに完成するのか不安だ。しかし、ボンベイの経済界、政界のトップにサポートを要請し快諾を得たことが、せめてもの救いだった。本日(10月15日)、10カ所のうち6カ所で着工され、進んでいるとの報告が入り、ホッとしているところである」。

国防の厳しさ実感

ベルシャ湾岸への掃海艇派遣、国連PKO活動への自衛隊派遣など、今年は自衛隊について考え論議する機会が多くなった。国づくりデザイン推進会議(中央官庁とJCのパイプ役)としても、果たして自衛隊に関する知識は充分なのだろうか、という素朴かつ重要な問題意識から、自衛隊を知り防衛についての理解を深めるべく10月5日から2泊3日の日程で、北海道の防衛庁視察研修を実施した。以下、岩崎常吉(堺)の体験記(要約)。

「千歳駅に到着。自衛隊員の笑顔に迎えられ、航空自衛隊基地に向かう。アラート(領空侵犯機に対するF15のスクランブル発進など行なう)現場を見学。夕方、自衛隊員との懇談で「私達は自衛隊に反対する人達のためにも、命をかけて国を守ります」、「PKOに反対する人達がいるからこそ、健全な国家と言えるのではないだろうか。誰ひとり反対しないことの方が恐ろしく、危険なのではないか」との話には考えさせられた。翌日は、陸上自衛隊の最新鋭の部隊装備を見学。

百聞は一見にしかず。自衛隊を身近に感じ、国防、

PKOなどを考えるきっかけとなった。いろいろな場面で日本が国際問題に関わらざるを得なくなった時、一番危険なことは、取りあえず自分には関係ない、という無関心さではないか。20歳前後の自衛官のキビキビした態度、キラキラと輝く目は印象に残った。自分の仕事が日本の安全・国防を担っているという誇りと、愛国心から出るものなのだろう。最近になく感動した」。

でっかくおがれ地球市民 〈函館全国大会〉

第41回全国大会は10月1～4日、函館市で開催された。前日までの寒空は嘘のように晴れあがり、人口31万の函館に全国から約1万8000人のメンバーが集まってきた。

会頭記者会見にはテレビ・新聞など約15社が集まり地球市民の意識高揚、地球的規模の個人運動の実践といったテーマに、質問が飛んだ。西村会頭は、地球の絵画コンテストや国境なき奉仕団、1人1日5円運動などの例をあげながら、「日本人は団体ではよく実践するが、個人レベルでは難しいことが多い。我々は青年らしく個人の運動として環境問題や国際貢献に取り組んでいきたい」と力説した。

第91回臨時総会では、ふるさと地球運動の核、「地球の絵画」「地球の詩」「地球の応援歌」コンテストの表彰式が行なわれた。ビデオ映像で紹介される「地球の絵画」入賞作の10点は、それぞれが素晴らしく優劣つけ難い作品だった。そして、全応募作品をモチーフに、アートディレクターの野口久光氏監修による地球の旗が披露された。

アワード、白馬JCにグランプリ

2日21時、LOM活動を顕彰するアワードセレモニーがホテル函館ロイヤルに約2000名のメンバーが集まり開催された。最優秀賞は北上JCと塩釜JCが受賞。注目のグランプリ(会頭賞)は、規定部門「JCづくり」推進賞を受賞した白馬JCの国際山岳観

光都市への「まちづくりひとづくり」事業に輝いた。人口1万6000人の小さな村の認証番号752という若いJCだが、JC運動にかける情熱は素晴らしいものがあった、というのが選考理由だった。

白馬山麓はアルペンスキーはじめ山岳観光のメッカで、年間500万人の観光客を迎える山岳リゾートである。だが、村部だけに古くからの年功序列の地域社会が温存されていた。そこに、強烈なインパクトを与える人物が現われた。事業の関係で、白馬に移ってきた鶴見増朗(1980年度日本JC社会開発委員長)の「白馬の若者は青年らしい汗を流していないね」の一言に触発され、ふるさと白馬にJCを、との機運が高まり、1989年に村を単位とする全国初のJCが、44名で設立された。

設立以来、国際山岳観光都市「白馬」の構築をJCの理想として掲げ、特に1998年長野冬季オリンピック招致運動に際しては、主競技会場の一つとして常に運動の最先端に立ち、地域住民とオリンピック開催の感激を共有すべく運動を展開した。「我々は、小規模LOMだからこそできるキメ細やかなまちづくり、人づくりの運動を展開し、白馬山麓の地域創造の旗手となる覚悟を胸に、青年会議所運動の継続に今後より一層の情熱を傾注する」と、抱負を語る。そして、目下(当時)、大山桜の植樹による21世紀に向けた地域ぐるみの景観整備事業「白馬山麓2001桜満(ロマン)計画」を推進中ということであった。

いけば、まぶいど! 記念式典

10月4日、函館ドック大会場で記念式典が挙行された。ちなみに「いけば、まぶいど」とは、行くと素晴らしいことがある、の函館弁。常陸宮・同妃両殿下ご臨席のもと開催され、西村会頭はこの一年を振り返って「京都会議で地球市民時代の幕開けを宣言して以来、全国のLOMのご協力で数々の事業を展開してきた。約7万枚の応募があった地球の絵画コンテスト。地球の応援歌も10月にはCD発売。海外でも沢山の貢献活動ができて、でっかくおがった地

球市民を実感している」と語った。

プレジデンシャルリースは第42代岡田伸浩会頭へ。岡田会頭予定者は「いつの世でも時代を動かすのは青年である。皆さんと一緒に爽やかな汗を流したい。LOM応援団から、まちの応援団を目指したい」と抱負を語り、会場を埋めた1万余のメンバーから、盛んな激励の拍手を浴びた。

そして、卒業式は上田徹監事(栗原)が代表挨拶を行ない、卒業生は壇上で肩を組んでの大合唱で、思い熱きJC運動に別れを告げた。

マイアミで、村田敦生ちゃんグランプリ

第47回JCI世界会議は11月9～14日、JC運動のメッカとも言うべきマイアミで開催された。世界会議場のジェームス・ナイト・センターには、世界60余カ国から寄せられた6万4000点以上にものぼる「地球の絵画」から選ばれた優秀作500点が展示され、2000名を越すJCメンバーが鑑賞した。

審査は来場者の投票によって行なわれ、優秀作10点が決定、その中から最高得票を得たグランプリには日本の村田敦生ちゃん(12歳・防府市)の作品が選ばれた。「みんながすみたくなる地球」と題するこの作品は、アイデアも色彩もユニークで、見る人を勇気づけるパワーに満ちた作品であった。

また、日本JC地球の絵画特別委員会は、応募作品から約70点を収録して絵本を制作し世界会議場で披露した。子供達の描いた絵を鑑賞しながら地球環境問題について考えよう、という趣旨で制作されたもので、会場で5ドル以上という価格で販売さ



西村会頭、雲仙普賢岳視察('92)

れた。その収益は、8月末にマイアミを襲った超大型ハリケーン・アンドリューの復興対策基金として寄贈された。地球を救う運動の成果が、災害復旧に活用された。

日本は3賞を獲得

注目のアワードセレモニーは40カ国より約370事業のエントリーという激戦だ。日本JCは15部門に20事業がエントリーし、3部門で栄冠を手にした。

最重点テーマ賞=グローバル・トレーニング・スクール(GTS)。他人のために行動し、それを自己の研修にあてた初の試みが高い評価を得た。主宰した大本宗司研修室長(八幡浜)は「大袈裟な国際貢献ではなく、ちょっと素敵な体験をする、という全く新しい事業だった」と企画の斬新さを語った。担当の山口委員長は「エントリーは当初から考えていた。世界から評価されて本当に嬉しい」と。

NOM対象の社会開発賞=国際協力資金運営会議。91年よりJCメンバーは1人1日5円の募金運動を行ない、その資金は各種の国際貢献事業に投入されている。本年度は世界青年環境会議や国境なき奉仕団などを支援した。担当の鏑一郎議長(金沢)は「少しのお金でも一年集めれば沢山のことができる、ということが理解していただけたのではないか。各国JCに対しても有益な示唆を与えたと思う」と、受賞の意義を語った。

LOM対象の社会開発賞=城址活用アイデア募集事業・金沢JC。金沢大学が城址より移転した跡地約22万平方メートルの活用アイデアを国際的に募り、市民の関心を喚起しようという事業に内外から10件を超すアイデアが寄せられた。これを金沢JCは立体モデルやビデオ化して市民に紹介し、関心を高めることに成功。これが評価され、今回の受賞となった。

93年度のJCI役員選挙では、会頭にロビー・ドーキンス(アメリカ)が選ばれ、日本担当副会頭にはマルコ・マルテリ・カルベリ(イタリア)、愛称マルコちゃんと決定。熱い汗をかいた92年度のJC運動は幕を下ろした。

輝け! まちの地球市民

「さわやかな汗で笑顔の星づくり 輝け! まちの地球市民」。

1993年、JCのスローガンだ。岡田伸浩会頭(横浜)のイメージにぴったりではないか。バブル経済が崩壊して1年、わが国の多くの企業・産業は厳しい状況に直面している。政治改革も一向に進まない。日本列島は重苦しい閉塞感に覆われていた。その暗雲を吹き飛ばせ、と言わんばかりの勢いを感じる。

1月21~24日、全国から2万人を超えるメンバーが京都に集まってきた。前日までの好天が嘘のように冷え込み、恒例の下鴨神社の参拝は雪に見舞われた。京ではこれを吉兆というが、身の引き締まるようなスタートであった。

22日は、理事会、評議員会等の諸会議で1年間の活動計画が討議された。午後6時、新年名刺交換パーティーだ。2名のガールスカウトが手旗信号で「さわやかな汗で笑顔の星づくり……」と描いた後、岡田会頭はじめ役員が紹介され、鏡割り、乾杯で大懇親会となった。

最終日、24日のハイライトは、岡田会頭の所信表明である。

「旧年、暮も押し詰まって訪れたスモキー・マウンテンで出会った苦境にめげず夢を描いて生きている子供達、あるいは雲仙・普賢岳の被災者である島原のJCメンバーが希望をもって復興に励む姿などに、私はJCの原点を見出した。

変革の能動者たらんとするならば、まず私達が行動しなければならない。敢えて、今ここでJCらしい政治改革への取り組みについて問うてみたい。また、景気が悪くてJCどころじゃない、とよく耳にする。だが、果たしてそうだろうか。私は敢えて、こういう時だからこそ今まで以上にJC運動に取り組もう、と言いたい。何故なら、企業はまちに支えられ、人は人に活かされているからだ。私の提唱する“もったいない運動”の基本的な考え方は、全てをそれぞれらしく活かすことにある。

JCは素晴らしい機会を与えてくれる。一度しかない人生を、豊かにしてくれる。しかし、JCは所属するだけでは何も与えてくれない。様々な機会を、活かすも殺すも自分自身なのだ。活かさなければ、もったいない。まず、できることから始めよう。肩の力を抜いて、しかし青年らしく、あくまでも前向きに……。さあ、上着を脱いで、腕をまくって、汗をかこう! 机の上で考えているのは似合わない!」。

93年度のJC運動はキックオフした。今年度の運動は、新設を含む5室によって展開される。①国際室長樋口信治(大阪)「世界とJCIを身近に」。②国際貢献室長岡崎重彌(山形)「顔の見える国際貢献を志向する」。③環境室長原田信隆(札幌)「持続可能な経済発展を考え、あらゆる方向から環境問題に取り組む」。④まちづくり応援室長永田隆(東京)「まちづくりに関する総合的な支援/推進・調査・研究」。⑤総務室長才門正男(岸和田)「分かりやすく、参加しやすい組織づくり」。

随所に「もったいない」精神

岡田会頭の提唱する「もったいない」精神が反映され、京都会議でもユニークな試みがなされていた。従来、各委員会等が独自に制作配布していたPRツール類を、京都会議プログラムが収録されているJC PRESS 1月号に集約して配布したところ、大好評で用意した1万部は全て参加者に持ち帰られた。

会場各所には「もったいない箱」が設置され、再利用可能なゴミは回収された。新年名刺交換パーティーも、LOM相互訪問等を簡素化しようとする「もったいない」精神溢れる企画だった。JC PRESSには、「もったいない運動」情報交換コーナーが開設された。「知らないなんてもったいない」情報や、「使わないなんてもったいない」用品や、「参加しないなんてもったいない」イベント情報などを集め、広く紹介していくことになった。

「もったいない」ベスト3

同紙には、使用済みテレカがミルクに変わる、と

いう情報も掲載されていた。日本では価値のない使用済みテレカも、ヨーロッパ各国では収集家がいるので1枚20～50円で売れる。その収入で医療品など援助物資を購入し、存在が危ぶまれる少数民族の支援を行なっているボランティア団体を紹介していた。テレカ100枚で子供一人一年分のミルク代に、1000枚でマラリア予防の錠剤3万5000錠が購入できる、と。「国際貢献できることを知らずに捨てていてはもったいない。日本JCのテレカ係まで送って下さい」とあった。

6月15～7月10日に実施されたブッシュホンアンケート「もったいない運動」の調査結果によると、「もったいないもの」ベスト3は「食べ残してしまう食事」、「もったいないの心が忘れられつつあること」、「まだ使えるのに捨ててしまう衣類・家具・電化製品」。また、生活の中で「もったいない」を意識している人は8割にも達した。そして、子供達に「もったいない」の心を伝えていく必要性を感じている人は、実に98%に達していた。

地震の釧路へ、 空港問題を抱える八重山へ

1月15日、釧路市を中心とする道東地区をマグニチュード7.8(推定)の地震が襲った。最大断水265戸、停電9000戸、ガス供給停止9265戸に達し、被害総額は313億円(2月2日現在)を超えた。2月1日、岡田会頭は釧路市役所災害対策本部を訪ね古谷助役にお見舞いを述べた後、釧路JC例会に出席。「親身になって心配する多くのJC仲間がいることを再認識し、これを転機にJCらしく活躍してほしい。釧路JCのスローガン原点・変革・実践のもと、奮励尽力を」と、激励した。

4月26日、新空港建設に揺れる八重山に飛んだ。現空港が手狭になったため、十数年前に新空港建設を図ったことがある。しかし、予定地が全国でも有数の珊瑚の生息地であったことから中止となり、その後3カ所の候補地も様々な問題で決定に踏み切れ

ていない。JCは現空港の拡張を提案したが、現空港の恒久化を懸念する周辺住民の反対で進展できない。岡田会頭は例会で「具体的な指示は何もできません」と前置きした後、「JCは個人の利害関係にとらわれず、政治的にも左右されることなく行動する唯一の団体であることを忘れず、行動してほしい。我々も大いに応援する」と激励し、参考までに同じような問題を抱えているLOMの事例を紹介した。

会頭ホットラインで情報共有を

翌朝、出発までの短い時間に岡田会頭は、ホットFAXで八重山の現況を全国理事長宛に発信し、「八重山JCに参考になる事例があれば、是非差し上げて下さい」と、書き添えた。そこが凄い。ホットFAX情報システムは、昨秋、岡田会頭予定者の強い要望で創設されたものだった。第1弾として「あなたの声を聞かせて下さい」を合言葉に、93理事長予定者ミーティングで会頭ホットラインに繋がるオートダイヤルテレカを手渡し、11月までに約70件の理事長の声が寄せられた。「まちの応援団」を標榜し、情報を共有すべく共に受・発信できる組織づくりを目指す、その熱意と知恵が響いてくる。

まちづくりアドバイザーを派遣

まちづくりデザイン会議は、今年度もアドバイザーの派遣事業を推進している。住友生命の助成によって運営されている事業だが、3月の沼田に続いて4月は串木野に派遣された。串木野JCの「愛とロマンを求めるまちづくりを市民一人ひとりの手で実現しよう!」との呼び掛けで実現した。行政・市民の参加のもとに開かれ、行政や専門家の講演に引き続き参加者全員の1分間スピーチで本音の意見交換が行なわれ、予定の4時間を過ぎても誰も席を立たなかったという。川崎弘一理事長の「市民こそが、まちの活力源。後戻りできないまちづくり運動を、焦らずじっくりやり続けます」との決意表明で終了した。

同会議は10月までに60カ所の市民団体並びにJCに専門家を派遣する、という。それにしても、4時

間以上の1分間スピーチに誰も席を立たなかった、とは驚く。

英国の「トラスト運動」を訪ねて

他方、まちづくり市民財団の阿部芳三理事長ら3名は、真のまちづくりとは何か、の答えを求めて、英国トラスト社会の視察に旅立った。以下に、JC PRESS掲載の報告要旨を紹介する。

「トラスト運動」という言葉は、英国では公益的な市民活動の総称を言う。19世紀末、産業革命によって世界を制覇した英国では、無秩序な開発から美しい自然景観や歴史的建造物を守るため、市民の手によって買い取る「ナショナル・トラスト運動」が始まった。あのピーターラビットの絵本の収入が、初期の運動を支えたという。

50年ほど経つと、この運動は「シビック・トラスト」のもとに集い、各地で展開されるようになった。最近では、荒廃した土地や都市環境を再生するために、企業や行政も巻き込んだ「グランドワーク・トラスト」が設立され、多くの成果を上げ始めている。

驚いたことに、英国の地方自治体には自治権がほとんどなく、そこに住む住民の手中にあった。英国の人々は、まちづくりを義務・正義感・宗教心からではなく、生活の楽しみの一つとして捉えており、気軽に楽しそうに活動していた。私達の探し求めていた回答は、この国の市民活動の中に、発見することができた。



(財)まちづくり市民財団
英国トラスト社会視察('93)

北方領土現地大会に 北方四島の少年が初登場

2月7日、日比谷公会堂で「北方領土返還要求全国大会」が宮沢喜一首相、鹿野道彦総務庁長官北方対策本部長、渡辺美智雄外相はじめ各政党代表を来賓に、約2500名の参加者を得て開催された。

主宰の実行委員会は約100団体で構成され、JCも一団体として参加した。吉田純也副会頭(三国芦原金津)は、「各地JCおよび日本JCが北方領土返還のためロシア視察、全国大会、その他各種の交流事業を精力的に展開している」ことを報告した。渡辺外相は「政府としても協力していく」との意向を示し、行政に対しても北方領土返還への国民的機運の高まりを印象づけることができた。

そして、日本JCの第24次北方領土視察・現地大会は7月31～8月1日、根室・納沙布岬で開催された。30日から根室入りしていた北方四島の少年少女ビザなし訪問団51名を含む、延べ約500名が参加。岡田会頭は記者会見で「当事業は、北方領土問題を現地の視点で四島住民と共に考えていくことを狙いとし、今後とも継続していくつもりだ。また、来年はロシアJCのメンバーを大会に招きたい」と抱負を語った。

大会式典は約250名の参加のもと行なわれ、会頭は「日ロの交流を更に実のあるものとするため、北方四島の一括返還を早期に実現することが必要」と挨拶した。続いて、初の試みとして、2名の北方四島少年が登壇した。「北方領土は僕達が大人になるまで残る問題だと思う。その時に合理的、理性的に解決できるよう、お互いが理解し合わなければならない」と挨拶し、満場の拍手を浴びた。

JC使節団、モスクワへ

4月27日から5月2日まで、日本JC吉田副会頭、樋口国際室長、並びにCIS関係委員長吉田大造(尾道)はじめメンバーによる使節団がモスクワを訪問していた。JCIへの正式加盟を目指すロシアJCの支援、および政府要人に対するJCのPRが目的だった。

一行は、ミッションに同行したモジブルホックJCI副会頭とともにロシアJCを公式訪問。歓迎の挨拶に立ったコピョフ・JC会頭は「92年に8つのLOMでスタートしたが、いまや40以上を数えるまでになった。日本JCおよび各国NOMの援助と、今回のミッション参加者に心から感謝する」と述べた。

吉田副会頭は「私達は世界中に37万人の仲間がいる。今後、ロシアJCの皆さんが加わることは、大変に喜ばしい」と語った。JCI副会頭は「今回の日本JCとロシアJCの努力が、ロシアJCのJCI加盟に向けての重要なステップになることは間違いない」と、ミッションの重要性を示唆した。

国境なき奉仕団、 ソマリア難民緊急援助へ

国境なき奉仕団は2年目を迎えた。4月19～27日、山本潤副会頭(伊丹)を団長とするソマリア難民救済プロジェクト第1次隊24名が、ジブチ共和国へ向かった。ジブチは人口50万人の小国であり、そこへ約13万人のソマリア難民が流入している。人口の25%にも達する難民は、この小国にとっては過重で、国際機関やNGOに援助を望んでいた。

現地入りした奉仕団は、AMDA(アジア医師連絡協議会)に頼まれた医薬品等を現地側AMDAに引き渡す。AMDAは現地における日本で最初のNGOで、その場で情報交換を行なった。現地で活躍している日本人医師によると「日本政府に薬品を送ってもらっても届かない。どこかで消えてしまう」と、直接



国境なき奉仕団ソマリア
難民救済プロジェクト('93)

的な物資援助の必要性を強調していた。

奉仕団は、市内近くの難民キャンプを視察する。臭気が凄い。雨が降れば汚物で一帯が汚れ、環境衛生は極めて悪い。もちろん、衣服や靴もなく、子供は裸同然だ。一行は、物資配布班と物資数量確認班に分かれて行動を開始する。

キャンプでの物資配布はONARS(難民救済委員会)の配布プログラムを混乱させるので、形式的な少量配布に止めた。物資確認班は業者の車で港の物資貯蔵庫へ。ジブチ市内で購入した砂糖100トン、米80トンのほか小麦粉、パスタ、食用油、毛布を確認したうえ引渡し式を行ない、ONARS代表者に譲渡した。貯蔵倉庫には救援物資が備蓄されており、定期的に配布するとのことだった。

「今回の援助は非常に歓迎され、時宜を得たものと思われた。この事業は、全国メンバー6万4000名の1日5円寄付による国際協力事業費の一部を有効に活用したと確信する。貯蔵庫に入れられた救援物資を眺め、今後は衛生環境の整備と井戸を掘るなど飲料水の確保が課題であるように感じた」と、奉仕団の報告記にあった。

ハブニング! ソマリア難民救援隊

10月9～14日、第2次ソマリア難民救援隊12名がジブチを訪問した。ところが、ハルゲイサ病院でハブニングが生じた。カメラを持ち込もうとした一行に、一人のソマリア人医師が立ちはだかり「院内にビデオを持ち込む人は大勢来たが、誰も患者に何もしてくれなかった。冷やかし半分なら、すぐ出て行って



GTSフィリピン('93)

くれ」と。西村予史男団長（静岡）は「救援物資を直接手渡すことと、今後どのような活動が必要なのか視察に来たのだ。ビデオは私達の活動への賛同者を募る目的がある」と訴えたところ、件の医師は非礼を詫びたということだった。

その後、一行は北部ソマリアで、ソマリランドと称して独立運動を継続している副大統領に会見した。同氏は「自動車もラジオも日本製なのに、日本人に会うのは初めてです。これからも、日本からの援助に期待します」と言われたという。一行は、この言葉に、日本は顔の見える国際援助をしなければならない、と痛感させられたのだった。

GTS、フィリピンに根付け日本人の心!

4月11～17日、93年度グローバル・トレーニング・スクール（GTS）がフィリピンで開校した。このGTSは、難民自立のための貢献活動ならびにスラムの子供達との交流を通し、地球市民としての自覚をもつ「人づくり研修」のプログラムだ。この1週間、山本潤副会頭を団長とする参加者350名は、アエタ族自立のための植林事業とスモーキーマウンテンの子供達との交流に汗を流し、そしてインドア研修も行なった。

11日、全国からの参加者がフィリピンに到着。多発するゲリラに備える警察のものものしい警備の中、宿泊地に向かった。12日、植林事業のためアエタ族の再定住地バジブルを訪れる。メンバーがアエタ族と共に汗を流すことにより、メンバーには国際貢献の本質を、アエタ族には単なる物資の供給ではないことを理解してもらい、アエタ族が自立への道を進み始めるのが狙いだ。植林は700名によって行なわれ、マンゴ、ココナツ、ナラ、竹、マドレカカオ等、目標を上回る約3500本を植え付けた。植林事業の資金は日本自転車振興会、苗木の提供はセイブ・ザ・チルドレン・ジャパン（SCJ）の協力によるものであった。

役に立つ木材部会

この植林事業には、もう一つの協力者がいた。日

本JC木材部会だ。本多一義業種別部会運営会議議長（豊川）、大高多恵男木材部会副部長ら調査隊7名がGTSの植林事業に先立つ3月18～20日、技術指導のため現地に入っていた。

一行は、植林予定地の地形、水系、土壌など自然条件のほか住民の状況など社会経済的要件についても調査した。予定地のほとんどが斜面で、雨季には水路になってしまう所が多い。乾季には井戸もないので給水源が心配、など問題点を把握し助言を行なった。

植林は雨季に行なうのがベスト。今回は乾季なので悪条件の土地は除外すること。土壌はピナツボ山の火山灰に覆われているので掘穴の深さを検討し、できれば火山灰を除去すること。アエタ族は焼畑農業を行なうため、火が植林した木に移らないようにすること。植林は長期的な事業だから、目先の利益にとらわれないこと等々の助言を残して帰国した。

まことに、頼もしいアドバイスではないか。「役に立つJC それ業種別部会」とは会員募集のキャッチフレーズだが、ビジネス以外の社会開発運動にも本当に役に立つ木材部会だ、と感心させられる。

2日目はインドア研修だ。グレゴリー・クラーク上智大学教授、上田SCJ現地駐在員、現地の学生、NGO、フィリピンJCメンバーを交えて、国際感覚を実感し体得する学習を行なった。そして3日目、NHKマニラ支局長が同行し再び植林事業に携わった。このアエタ族との植林事業はNHK総合テレビ『おはよう日本』で放映された。

一日父親・母親に

4日目、いよいよスモーキーマウンテンの子供達との交流事業だ。ゴミの山、悪臭、メタンガス、栄養失調、皮膚病……、ゴミ運搬トラックに今日の糧を求めて群がる子供達。その子供達の手をとってバスに乗り込み、フィリピン大学サンケンガーデンに向かった。メンバーと子供が1人ずつペアになり、メンバーが一日父親・母親を務める。クレヨン、スケッチブック、凧などをプレゼントして昼食後、凧揚げ、

ヨーヨー、フォークダンス等を楽しんだ。子供達は笑顔で応えてくれた。

子供達を帰りのバスに乗せ、手を振るメンバーの目には熱いものがこみ上げてくる。ホテルに戻ったメンバーは、満天の星の下、岡田会頭を囲む懇談会が夜更けまで続いた。

5日目、総合研修としてグループ討論・発表会等が行なわれ、全プログラムは終了した。総括として、このGTSの報告記には次のように記されていた(抜粋)。

「気温40度を超える灼熱の下の植林で、メンバー3名が作業中に担架で運ばれ1名が入院した。講演中に停電する等のハプニングは連続だった。しかし、団員の理解と協力で多くのことを得ることができた。

特に、スモーカーマウンテンの子供達との交流は、私達が忘れかけていたもの呼び覚ましてくれたのではないか。あの子供達の歌声は、生涯忘れることはないだろう。いつの日か、また、あの輝く瞳の子供達に会えることを祈らずにはいられない。

今回の事業を通し、参加者一人ひとりが国際貢献の意義を見出し、NGO元年を標榜するJCメンバーの一人として何をすべきか、何ができるのかが見えてきたのではないだろうか」。

キャプテンクック来島以来の感謝

ここで、国際貢献事業の話題をもう一つ、書き添えておきたい。

アジア国際貢献委員会は7月10～19日、南太平洋はメラネシアに属するバヌアツ共和国政府の要請により訪問した。1980年にイギリスから独立したばかりの、80余島からなる島嶼国家だ。JCは物資供与に伴って技術移転を行なう、というコンセプトに基づき主に保健衛生教育と学校・社会教育用ビデオの制作・指導を行なった。

例えば、マラリア対策として顕微鏡の使用・修理・管理方法等マイクロスコピストの養成から環境衛生の知識(菌の磨き方、手の洗い方等)、蠅取り紙や

モスキートネットの使用法、裁縫技術などである。

地元の長老は、「キャプテンクック来島以来、イギリス、フランスが交互に統治してくれたが、これほど子供達のために一生懸命にやってくれたのは、あなた方が初めてだ」と、しみじみ語ったという。

JC東京会議、地域主権運動を推進!

従来の青年経済人会議を「JC東京会議」と改称し、7月24～25日に新高輪プリンスホテル国際館パミールで開催した。台風4号の影響で豪雨に見舞われたが、7000人を超える登録者が集まった。

「輝け! まちの地球市民、地域が JAYCEEが創り出す『地域主権社会』の到来」をテーマに、政治改革・地方分権・国際貢献・環境等の問題にできることから取り組もうと、「全国理事長会議」「会員セミナー」「まちの応援見本市」を3本柱に開催された。

理事長オープンセミナーでは、牛尾治朗元会頭が「日本の新しい変革への対応、不連続のメリットを求めて」と題する講演を行なった。選択型会員セミナーは23コース開催され、参加者は延べ5000名に及んだ。

本年、「まちの御用聞き」を標榜する日本JCは、2日間にわたって崑崙の間で「まちの応援見本市」を開催、元気印の約70LOMはじめ業種別部会など計160のブースが設けられた。特に注目を集めたのは、会場に設けられたステージ。代わる代わる我がまちの伝統芸能や祭りを披露し賑わっていた。

最終日は、小野曜運営会議副議長より「それぞれのまちで、それぞれの地域主権運動を勇気をもって推進する」との行動宣言が朗々と発表され、割れんばかりの喝采が沸き起こるなか、2日間の会議は幕を閉じた。

あ 愛っ晴れ、地球市民〈岡山全国大会〉

9月29～10月3日、第42回全国会員大会が岡山で開催された。「日本一のおもてなし」に「もったいない」精神が加味された本大会には1万7000名が集ま



TOYP大賞
'93受賞記念式典

り、簡潔にして、かつ感動的に、全日程は進行していった。

TOYPグランプリ、小島あずささん

10月2日、岡山市民会館で第7回TOYP大賞の受賞記念式典が行なわれた。149名のエントリーから10名選ばれたが、共通点は気負うことなく地球市民として当然のごとく活動に取り組んでいる点に見られた。グランプリに輝いた小島あずささん（茅ヶ崎推薦）は、「海をきれいに」「地球をきれいに」という考え方で、誰でもできるゴミ拾いからと3人で始めたところ、今や数万人も参加するイベントにまで至った、という活動である。

褒賞グランプリは高知JC

2日午後9時、LOM活動のオリンピック・褒賞アワードが岡山国際ホテルで2時間にわたって行なわれた。準グランプリ・最優秀規定部門賞は帯広の「STOP! AIDS in十勝キャンペーン」に、同最優秀自由部門賞は鳥原の「普賢岳噴火災害における緊急支援および復興事業」に与えられ、グランプリは「ひとづくり推進賞」を受賞した高知JCの「はばたけ天使の翼運動」に輝き、岡田会頭から賞状と副賞100万円が手渡された。高知の事業は、在宅の重症心身障害者の戸外活動を支援するとともに、広く市民にそれぞれの生活の中で無理なく参加できるボランティアを提案したもので、障害者の東京ディズニーランド

旅行が実現し、後に高知ブロックの運動にまで発展していった。概要は、項を改めて叙述しよう。

記念式典、「思い出の渚」

最終日の3日、コンベックス岡山で開催された記念式典には、常陸宮・同妃両殿下がご臨席になり「JCの活発な活動には、いつも感銘している。今後もまちづくり、国づくりに精進してほしい」とのお言葉があった。岡田会頭は、横浜での全国大会以来、毎年欠かさずことなく全国大会にご臨席頂く両殿下に謝辞を述べた後、「本日は私の生涯最良の日である。生涯一JAYCEEであり続けるし、卒業するメンバーを含めた全メンバーにも、その精神を期待する」と挨拶。

第43代会頭に決まった小原嘉文（佐賀）に、プレジデントリーフが引き継がれた。小原次年度会頭は「普通の生活者の目線でJC活動を行ないたい。JCの自己革新にも積極的に取り組む」と、力強く決意を語った。

そして、式典の最後は卒業式だ。毎年、涙、涙の感激シーンが演出されるが、今年は2000名を超える卒業生が登壇、ゲストのワイルドワンズと「思い出の渚」を大合唱し、JCライフに別れを告げた。

高知JCの「はばたけ天使の翼運動」

高知JCは本事業に取り組むに際し、まず障害者を取り巻く問題点を調査した。行政は、障害者にも“ゆとり”や“いきる目標”づくりは必要と認めているものの、手が届かない、万一の責任は負いかねる、という姿勢が見られる。社会はどうか。例えば、航空機を利用する場合には車椅子利用者の人員制限とか、診断書や誓約書の事前提出が義務づけられる。ホテルの宿泊では食事や排泄等の問題がつきまとう。一般市民は、何とかしなければと考えている人は多いが、具体的な行動に移せる人は少ない。障害者本人や家族は、高齢化によって外出が困難になりつつある。

重症の娘をもつ母親の言葉

だが、一番の問題はJCにあった。いわく、単年

度制では継続が最優先される福祉活動は展開しづらい、労働だけを継続する事業にはしたくない、と。何よりも、メンバーの障害者に対する認識が余りにも低い、という現実だった。そんな中、JCが行動に移す決心をしたのは、ある重症の脳性麻痺の娘をもつ母親の言葉だった。「たとえ、この娘が途中で死んでも構わない。一度でいいから、ディズニーランドに連れて行ってあげたい。ただ家の中で生かされているだけでは、この娘があまりにも可哀想……」。ディズニーランドは、彼女達親子にとって一生に一度の、しかも娘の元気なうちに、親の元気なうちに、という時間限定の夢だったのだ。

高知JCは1年間にわたる調査とメンバーへの啓蒙活動の結果、次の提案をした。①より多くの人が少しずつ、それぞれのパーツを受け持つボランティア。②すべてを手伝うのではなく、足りない部分だけを支援する。③最も重い障害者が飛行機や一般ホテルを利用して旅行し、楽しめる体制を整えること。

東京ディズニーランド旅行を

そして、具体的な事業としては、①在宅重症心身障害者が、毎年、東京ディズニーランド旅行を実現できるシステムづくり。②その過程で、緊急時の医療体制や交通機関、宿泊、食事、排泄、休憩等の問題に対する対策。③マスコミの告知広告やJCが参加する祭りの場等で、目的の見える募金活動を実施する。その資金は、旅行に同行するボランティアの旅費、宿泊費に当てる(障害者と家族の費用は全て個人負担)。



褒賞グランプリ、高知JC('93)

こうして、翌年度には高知ブロックの統一事業として取り上げられ、この運動を全県下的な市民運動とすることを目指した。その結果、JCシニアクラブやベンチャークラブほか多くの団体、個人を巻き込み、新たにボランティア市民団体「天使の翼会」の発足に至った。この事業に対し、東京都庁や全国重症心身障害者を守る会等、県内外から問い合わせが殺到、今後この事業をきっかけに全国で障害者の社会参加、戸外活動が積極的に行なわれ始めることを確信するに至った。

なんとスケールの大きい事業ではないか。感動させられた。

自衛隊見学、沖縄へ

今年も11月10～11日、自衛隊見学が行なわれた。まちの応援なんでも相談室の岩田恒典委員長(会津喜多方)はじめ25名のメンバーと関係者数名が参加した。その取材記録を抜粋してみよう。

埼玉県の入間基地から自衛隊特別機(C-1輸送機)で航空自衛隊那覇基地に着陸・見学。隣接地の海上自衛隊那覇基地に移動。翌日、陸上自衛隊那覇駐屯地を見学の後、沖縄本島の北150キロにある航空自衛隊沖永良部基地にヘリコプターで移動した。沖縄の青い海、美しい山々を眺めながら北のサイトに到着。領空侵犯で侵入した機体を捉えるレーダーサイトがある。まさに、南の守りを支える要だ。

基地には珍しく外柵がない。全体員の24%に当たる43名が、この島の出身者とのことだった。島と一体化した感がする。自衛隊に対する一般的なイメージである固い・怖いという感じがほとんどない。おそらく、自衛隊が求めている方向性は、この基地と島民の在り方のようなものだろう。

研修に随行してくれた山下3等陸佐は、「こうして国のために汗する人々がいることを、知ってもらうだけでも研修の意義は大きい。すべては、自衛隊を知ってもらうことから始まる」と、語った。

MOTTAINAI、 1994JCI公認プログラムに!

11月21～27日、JCI世界会議が香港で開催された。岡田会頭の提唱によって日本列島各地で開催された「もったいない運動」を、是非とも世界の舞台にまで拡大しようという意気込みで臨んだ日本JCは、香港会議でJCI公認プログラムとするよう提案した。このため、次年度担当の鈴木雅博副会頭（江南）、もったいない運動推進特別委員長仲浩（中津）らは17日より香港入りして準備に当たり、各エリア会頭会議等に出席して理解を深める活動をしたうえで、総会に提案した。その成果があって、満場一致で可決され、晴れて「MOTTAINAI」は1994JCI公認プログラムとして世界で展開されることになった。

役員選挙では、日本から立候補した佐藤嘉信（宮崎）が満票で副会頭（USJC担当）に当選した。財政顧問には、王子英法制顧問（横浜）が決まった。

日本JCに、新設のNOM賞

世界会議のハイライト、アワードセレモニーは27日午後6時、カルチャーセンター・グランドシアターに正装の各国代表が勢揃いした。日本は27件エントリーし、初めて聞いた日本JCのコールは笠岡JCの青少年活動賞だった。子供達と無人島に渡り、原始体験しながら「もったいない」精神を学ぶ事業。会員49名という小LOMの山名照知理事長と岡田会頭に満面の笑みが浮かぶ。



世界会議 もったいない運動 JCI公認プログラムへ（'93）

今年度唯一の女性理事長川村恵美子率いる塩釜JCもコール。自分達のまちの歴史に誇りをもとうと企画した薪能等の事業が評価され、広報活動特別賞が授与された。

褒賞は順調に進行し、日本は10個のトロフィーを獲得。その中には、新設の賞として最後にコールされた最優秀NOM賞に、日本JCが選ばれた。正副会頭らは壇上に駆け上がる。受賞の大きな力となったJCIプロジェクト委員会藤村委員長（盛岡）もステージへ。応援席からは万雷の拍手。日本JCの興奮は最高潮に達した。

「この賞は、メンバー全員で頑張ろうという岡田会頭の指導力の賜物だと思います。本当に良かった」とは吉田副会頭の弁。こうして、1993JC運動の幕は引かれた。

自己改革、京より始めよ

1994年、建都1200年を迎えた京都。

1月20日、好天には恵まれたものの、かなりの冷え込みに身の引き締まるのを覚える。小原嘉文会頭（佐賀）は年頭記者発表で「京都会議は自己改革の第一歩です。JCと一般社会の常識の差をなくし、市民とともにボランティアとして市民運動を進めて行きたい」と語った。

正副会頭会議はじめ理事会、評議員会等の各会議は、完全ペーパーレスになった。各種セミナーの

チラシやパンフレットの配布は廃止。新年名刺交換会は、宝ヶ池プリンスホテルから国際会館に換え、缶ビールと乾き物だけという簡素な形になった。華やかなアトラクションはなく、LOMナイトの相互訪問も一切廃止。小原会頭は「京都会議期間中、常に“自己改革と、もったいない”を念頭に過ごして下さい。名刺交換会の意義を原点に戻って考え直した結果、こうなった」と語る。

午後から降り出した雪は夕方には本格化し、辺りは一面の銀世界となった。交通機関にも影響が出始めてきた。そんな中、約1万8000人のメンバーが集まり、会場は今年一年にかけ熱い思いに満ち溢れていた。

白鳥芦花に入る

23日、大会議場での会頭所信表明はイベントホール等のスクリーンにも写し出され、同時にJC-NETを通じて全国に発信された。

小原会頭は、地元・佐賀が生んだ青年教育家で、後に青年団の父とまで呼ばれた田沢義鋪の教えを紹介した。

「田沢は青年達に、錦を着て故郷に帰ることを願う前に故郷を錦にすることを願え、と地域主義を説いた。平凡な道を非凡に歩め（当たり前のことを、人一倍入念にやれ）とも言っている。

田沢が目指した生き方とは、白鳥芦花に入る（白鳥が白い芦の花の中に飛び込むと姿は見えなくなるが、その時に起きた花のそよぎは波紋として広がっていく）という禅の教えであった。存在を誇示する生き方ではなく、しっかりと周囲に影響を及ぼしつつも自らは目立たない、そういう生き方を青年に説いた。これこそ、青年会議所の目指すべきものではないか。この田沢の生き方に触れ、私は答えの一つを発見した。それぞれの持ち場において自己を最大限に活かす生き方をせよ、ということだ」と、力強く語りかけた。

最後に、宮沢賢治の『銀河鉄道之夜』の一節を引用した後、「さあ、共に歩き出しましょう！今、私達地球市民が、まちを、国家を、世界を変えるのです！」と呼び掛け、テーマソングとするマライア・キャリーの『ヒーロー』が会場に響き渡ると、場内は万雷の拍手に包まれていった。

JC臭いことは止めよう！ JCらしいことをやろう！

94JC運動の基本方針は、①地球市民としての国

際貢献、②ネットワークを活かした環境問題への取り組み、③日本JCはまちづくりの応援団、④JCの自己改革の実践、⑤JCIにおける日本JCの役割、の5項目である。具体的な事業は、基本的には昨年を引き継ぐ。

小原会頭は「各地のLOMで話を聞いて悔しく思うのは、毎年、組織がコロコロ変わり、運動の名称も変わってしまうことです。今年は、徹底して継続していきたい。もちろんGTSを4つに分けて強化したり、日本JCの研修系の委員会を各地区・ブロックに移管するなど、若干の修正は行ないました。環境室が、ふるさと地球（環境）室に名称変更したのは、ふるさと地球という考え方を活動理念としつつ、もったいない運動を更に推進しよう、という狙いからです」と語る。

「臭いか、らしいか」、大いに議論を

やはり「JCの自己改革」が、新しい目玉として浮かび上がってくる。小原会頭は「既に、日本全国津々浦々でJC臭いことは止めてJCらしいことをやろう、と改革を始めていると聞きます。LOMによってJC臭いか、らしいか、の判断基準は違うでしょうから、この1年、大いに議論して頂きたい。今、求められているのはエリート集団としてのJCではなく、市民団体としてのJCです。求められている方向に一度、振り子を振り切ってしまう。そして、誰でも参加できるJCに変えてみようと思う。誤解しないでほしいのは、43年というJCの歴史、精神を否定するものではない、ということです。むしろ、原点に戻ろう、創始の精神を思い出そう、と申し上げているのです」と、抱負を語った。

会頭LOM訪問で、自己改革の徹底図る

2月7日、会頭LOM訪問は鹿沼JCから始まった。新幹線で宇都宮に到着。美野輪弘之理事長ら5名の出迎えだ。かつての大名行列と称される面影はなかった。出席率は83%、栃木ブロック内の12LOM

の理事長以下が参加し、250余名の参加で賑わった。例会ではJC宣言の朗読に加えて、「LOVE EARTH宣言」が唱和された。「地球市民として、自然と生活の共存する豊かな地域づくりに向けて運動する」という内容で、3年前の関東地区大会で採択されたもの。地球市民が世界を変える、と所信を述べた小原会頭にとっては、最高の歓迎の辞ではなかったか。

会頭はJCの自己改革について、「自分達の事業なのに人集めにチラシやプレゼントで釣るのはおかしい。京都での主な会議はペーパーレスで行なった。名刺交換会は簡素化し、1000円の登録料にした」ことの意義を話し、加えて「国際会館周辺と早朝の先斗町でゴミクリーンアップ作戦を実施し、収集したゴミの内容を分析・発表したところ、例年は騒ぐばかりのJCが良い事もするじゃないか、と話題になった」ことにも触れた。

ゴミの分析については、筆者も知らなかった。罪滅ぼしの勤労奉仕ぐらいにしか思っていなかったのだが、大違いだった。

早朝、先斗町清掃の意義

京都会議の「ふるさと地球クリーンアップセミナー」で、きくちゆみ（クリーンアップ全国事務局）講師は、「ただの美化運動ではない。データを取ることに一番の重点がある。どんな材料で出来ているゴミがいくつ、というデータを事務局に送ってほしい。これは世界的な運動で、去年は約60カ国が参加した。データはアメリカに送られて集計・分析され、業界や行政に資料として提出されて全世界の環境保全運動に活用される。地球を守っていくことほど、尊い仕事はないと思う」と、力説されていたのだ。先斗町の清掃作業には、こういう意味があったのだ。

小原会頭との熱い語らいは懇親会、2次会へと続く。約200人収容するカラオケハウスの2次会費は2000円。自己改革スピリッツに満ちた集まりは、夜の更けるまで盛り上がっていった。

「もったいない」、世界のトレンドに

「ありがたい」「恐れ多い」「惜しい」という心を「もったいない」の言葉にこめ、地域に根差した社会運動として全国に広めていくため、6月を強化月間とすることが決まった。

全国一斉に地区・ブロック・LOMでは例会、大会、各種行事などで「もったいない」運動に取り組む。そのために、「もったいない」グッズを製作した。①PRビデオ（日本語版・英語版）、②MOTTAINAI小鳥とハートのシール（JCI公認マークをシールに）、③もったいない度チェックシート、④アクションプラン（もったいない例会、日本語弁論大会、ディベート大会）、⑤もったいない講師リスト、⑥世界「もったいない」アイデア宝探しコンテスト応募用紙（1万ドル相当の航空券が当たる）。

俄然、もったいない運動に弾みがついてきた。ランダムに紹介してみよう。**[長崎]**外国人の弁論大会。**[北九州]**父親と子供が語り合うキャンプ。**[九州地区]**区内の全小・中学校の授業で取り上げてもらう。**[盛岡]**アイ・腎バンク登録推進運動。物のリサイクル・節約運動から一歩進めて2つの瞳に光を、2人の腎不全患者に快復を願う運動になった。**[茨木]**環境教室（市内31小学校の5・6年生対象に第2土曜日）を開催。**[東予]**懇親会時の食べ残しを透明の「もったいないパック」に詰めて2次会や家庭に持ち帰る運動。

鈴木雅博副会頭（江南）は「個人レベルで、家族も含め小さいことから大きな運動にしてほしい」と願い、村岡兼幸ふるさと地球室長（由利本庄）は「ただ思うだけでなく行動を起こすことが大切」と訴え、仲浩推進特別委員長（中津）は「色々な資料を送っているのだから、是非活用してほしい。捨ててしまっっては、もったいない!」と強調する。

小原会頭は「2年目にして、これだけ定着してきたのは、皆さんにその心があったからでしょう。海外でも100近い国で取り組んでおり、いまや世界のトレンドです。JC運動は世界の流れを先取りする運動で

す。会社で扱う商品も、そういう配慮をしなければいけない。そこまで考えられないようではJCメンバーとは言えません」と厳しい。

海外初のMOTTAINAIセミナー

5月3～7日、海外初の「MOTTAINAIセミナー」(エリアA会議で開催)に参加するため、森下矢須之国際室長(岡山)を団長に31名がマダガスカル首都・アンタナナリブを訪問した。日本JC団は到着後、連日夜遅くまで準備に励んだ。

セミナーをより分かりやすくするため、急遽、前日に日本語説明を英語に変更する芸当をやった。その努力の甲斐あって、エリアAメンバーも50人強の参加をみた。事例紹介では、モーリシャスJCのメンバーが飛び入りで「紙のリサイクル」についての発表があり、会議は大いに盛り上がった。

強化月間に、7割が実施

7月後半に実施したプッシュホン・アンケート調査によると、6月の強化月間中に約7割のJCが実施していたことが判明した。更に、この運動の将来について次のような回答が得られた。①個人レベルの精神運動にしていく32%、②日本JCの永遠のテーマとして継続26%、③JCIネットを活かしてMOTTAINAIが世界の共通語になるよう拡大26%、④よく分からない12%、⑤ケチケチ運動としか思えず中止3%、と極めて前向きな意見が得られた。次に、全国で展開された運動の中から、城陽JCの事業を紹介しておこう。

「わたしだけ」と思う心がゴミの山

9月18日朝、JCを含む10団体で構成される城陽環境協議会のメンバー約350名が「ビューティフル城陽」と銘打って主要幹線道路の清掃作業を実施。回収した空き缶は1万個以上になった。午後は「もったいない宣言」をテーマに公開例会を開催した。北野大講師は1時間半にわたる講演を、「もったいないの心は、地球を救うキーワードの一つだ」と、結んだ。

講演に先立ち、環境標語コンクールの表彰式が行われた。大賞を受賞したのは近藤麻奈さん(小学

5年)の作品で、「わたしだけ」と思う心がゴミの山。城陽JCは、この標語を看板にして、最も交通量の多い国道24号線沿いに設置した。この日は「JCのもったいない運動と城陽市民の心が一つになり大変有意義な一日だった」と、総括された。

新趣向のサマコンに集う7400余名

7月23～24日、猛暑の中で東京青山学院大学をメイン会場に「サマーコンファレンス」が開催された。昨年の「JC東京会議」の名称が変わり、会場も従来のホテルから大学キャンパスに、服装はカジュアルで、と自己改革のJCサマーセッションだ。テーマは「今こそ始めよう!地球市民としての行動を!」。地球市民会議、まちの応援見本市、各種セミナーの3本を柱に実施された。

「地球市民会議」は、国づくりデザイン会議(若手官僚、学識経験者等約40名)の3年にわたる調査・研究を経て最終答申「21世紀の新国土計画—地域からの国づくり」を発表。国づくりのキーワードを地域とし、地域と地球・国家・個人の間を捉え直してビジョンを描いたもの。「地方分権・住民主体の地域社会を実現させるには、地域に根差したLOMの活動が非常に重要な意義をもつ」と、第1部会長の大西隆東大助教授は強く訴えた。

「まちの応援見本市」にはJCや各県などから160を超えるブースが出展。まちづくり・環境・国際貢献・自己改革のゾーンに分かれてPRした。同大教室や周辺施設では「29の各種セミナー」が開催され、40度を超える暑さにもめげず、各会場はどこも満室だった。

北方領土返還運動、新局面へ

7月30～31日、根室・納沙布岬で第25次北方領土視察・現地大会が開催され、小原会頭はじめ300名のメンバーが集まった。

30日の前夜祭での討論会「日口の恒久的友好関係の確立を目指して」で、パネリストのガルージン在日



北方領土返還運動（'94）

ロシア連邦大使館参事官は「日本と四島との交流が、もっと活発に行なわれるようになってほしい。日本JCに対しては医療をはじめ援助を期待している」と語った。佐藤敏三根室JC理事長は「近年、北方領土問題の運動がマンネリ化してきている。日本JC全体として、見つめ直す時期ではないか」と率直な意見を述べた。

小原会頭は記者会見で「本年、日本JCは初めて北方四島ビザ無し交流に参加し、新たな運動の切り口を見出した。今後、我々はJCしかできない、JCらしい運動を行なっていきたい。来年もビザ無し交流を続け、できれば全国のプロック会長に参加して頂き、全国的にこの運動を展開したい。なお、本年JCIに正式加盟したロシアJCを通じ、全世界に北方領土問題を訴えたい」と語った。

山本潤95年度会頭予定者（伊丹）は「25年間、日本JCが続けてきたこの運動は、本年、一大転換をした。来年は地球市民という意識のもと、人道的見地に立った民間交流を行ないたい。そして、次回はビザ無し交流の出発日に現地大会を開催したい」と、意気込みを語った。

31日は小雨の中、納沙布岬で行なわれた現地大会式典には総務庁、北海道知事、根室市長はじめ多くの来賓が出席。小原会頭は「北方四島ビザ無し交流、ロシアJCとの交流を通して北方領土返還運動は、更に推進できるものと確信している」と力強く発

言した。続いて、竹中薫CIS・北方領土関係委員長（宝塚）が「日本国民の返還要求運動に寄せる情熱を一つにし、北方四島との交流を通じ相互理解を更に深め、あくまでも粘り強く、そして基本姿勢を曲げることなく、更に力強く運動を展開していくことを決議する」と、決議文を読み上げ式典は幕を閉じた。

国境なき奉仕団、3年目へ

ミャンマー難民カレン族を救援

今年で3年目になる国境なき奉仕団と同特別委員会を中心とする25名が団長・飯沼寛雄副会頭（小田原）、アドバイザー・長谷川豪男監事（浜松）、隊長・柳楽克人特別委員長（倉敷）の陣容で5月5～12日、タイ北部のミャンマー難民（カレン族）キャンプ13カ所を訪れ、食料、医薬品、学用品を贈る等の救援活動を行なった。

ミャンマー北部、タイ国境に接するカレン州に住む少数民族カレン族は、1988年の軍事クーデターにより政権を獲得したミャンマー政権と対立し、独立を決意した。しかし、彼等は政府側の攻撃や迫害を受け、タイ北部のメソト周辺に流出し、その人数は増え続けている。その数5万6028名に達し、16カ所の難民キャンプを形成している。

しかし、タイ政府は難民と認めないため農地開拓や森林伐採はできず、国連等からの公的援助も受けることができない。そのため食料や医療品等は各国NGOからの援助に頼らざるを得ない。国境なき奉仕



国境なき奉仕団 タイ国内ミャンマー難民支援（'94）



GTS 子供たちと一緒に ('94)



GTS 貢献事業 (フィリピン '94)



GTS 交流事業 (フィリピン '94)

団は、総額1300万円相当の援助物資を贈るため派遣された。この資金は、全国メンバーの1日5円の寄付による国際協力事業費の一部で賄われた。

バングラデシュの病院に救援物資

8月20～25日、同奉仕団7名がバングラデシュを訪問した。日本の本州ほどの国土に1億1000万人が生活する世界有数の人口過密国で、一人あたりGNP約180ドル、平均寿命52歳という最貧国だ。奉仕団はサトゥキラ子供病院とダッカ子供病院の救援要請により、医療物資等350万円相当を届けた。

「死に直面する多くの子供達の悲惨な姿を目の当たりに、援助の継続が必要なことを痛感した。なぜ自分達が生まれてきたのか、その意味も分からぬまま小さなベッドで死んでいった子供達の一人でも二人でも、貧困の輪から抜け出す手助けができれば、そしてそんな子供達が世界中に沢山いることを日本の人々に気づいて貰えれば、我々の活動は素晴らしいものになるだろう」と、特別委員長柳楽克人(倉敷)の報告記にある。

なお、一行は両病院訪問の合間を縫って孤児院を



国境なき奉仕団 タイ国内ミャンマー難民支援 ('94)

訪ね、文房具などを現地で購入し寄贈した。この資金は、特別委員会メンバーがドネーションで集めたものだった。

クロアチアの子供達に遊戯施設を

10月15～25日、同奉仕団および特別委員会4名がクロアチア共和国内(旧ユーゴスラビア) ガッシンシー難民キャンプを訪問、子供達と遊戯施設を建設するなどの援助活動を実施した。7月の第1次隊に引き続き行なわれた事業で、親日的な大勢の子供達が積極的に参加してくれた。

この事業は、完成した施設で遊んでもらうだけが目的ではない。完成までの過程も大切な情操教育の一つと考えて企画したものだけに、子供達の自主的な参加には団員一同大変に喜んだ。また、救援物資を寄付した学校の一つから、「第3次(11月5～16日)の団員が子供劇に招待された」との朗報が舞い込んだ。まさに、国境なき奉仕団冥利につける話題ではないか。

GTS、4地区の独自事業で拡大・強化

今年3年目を迎えるGTSは、4地区が独自の企画で実施することになった。事業や実施地区もバラエティに富み、参加人員も増加する。国際貢献をしながらトレーニングを積むという研修プログラムは、JCに定着・強化しつつある。

[北海道・東北・北陸信越]

第1班=ニューライフプロジェクトチーム。ドゥアン・プラティーブ財団が家庭崩壊や麻薬常用等で精神的・肉体的に歪んだ子供達を自然環境(タイ・トゥン



GTS (ネパール '94)



GTS (ミャンマー '94)



GTS (タイ '94)

カーワット村)の中で更正させる活動をしている。同チームは草刈、肥料散布等を子供達と一緒にこなす。

第2班=ワットサーキャオ孤児院(タイ・バンサデット)チーム。同寺院が慈善事業の一環として運営している。殆どの子供が親に捨てられ、心に深い傷を負っているはずなのに、瞳は輝き明るく礼儀正しい生活をしている。当チームは子供達と真の心の交流をし、JCらしい国際貢献をする。

[関東・東海]

フィリピンのパラワン島はジャングルと未開の地で、47部族の先住民が生活している。しかし、文明の影響はここにも現われ、不法伐採や不法焼畑が行なわれている。同プログラムは植林活動等により貢献し、地球市民として大切なものは何かを見つける旅とする。

[近畿・四国]

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン主催のグリーンホーム(比ケソン州セルナ市)でストリートチルドレンの自立のための教育事業の拡大、施設充実を支援する。

[中国・九州・沖縄]

A班=ミャンマー・ヤンゴン地区。ワールド・ブディスト・メディテーション・インスティテュート(僧院)は、国からの援助も受けられず7名の先生がボランティアで2000名の子供達に外国語を教えている。当チームは図書館の増築と教材等を援助すると共に子供達との交流を深める。

B班=ワットサーキャオ孤児院。バンコクより車で2時間の所にあり、2000名の子供達が共同生活を営んでいる。当チームはブロック製造機を寄贈し、子供達と彼等の財源の一つであるブロックを製造し、

共に汗をかく。

C班=ウドンタニ地区。タイ国内で最も貧しいと言われる地区の1中学2小学校でランチプロジェクトを計画している。また鶏や豚を寄贈し子供達と家畜小屋を作り、彼等の自立を助ける。

常夏のバリ、JCI初のビジネス会議

9月7~10日、バリでJCI初のビジネス・コンファレンスが開催された。JCマンの多くはビジネスマンであり、世界中で40万人にもものぼるネットワークがある。この特性に注目し、JCマンの利点を拡大することを目的に開催された。会議に先立って、日本JC本部団結団式で小原会頭は、「全力でインドネシアJC800名のサポートをしたい。また自己改革を忘れず、愛され、信頼される日本人を目指して行動しよう」と決意を表明。

議長を務める王子英JCI財政顧問(横浜)は、「登録は1900名を超える模様で、インドネシア最大の国際会議になる。この会議は、地球市民の時代3要素のうち経済発展に的を絞ったもので、この稀有なチャンスを最大限に活かして頂きたい」と述べた。

会議は基調講演、分科会、セミナー、そしてビジネス・ブースも開催され、最後に王子議長が総括しバリ宣言を発表した。「自由で公正な経済体制を希求し、自由貿易システム構築への努力を要請し、青年実業家のビジネス戦略を促進するために動機づけ、刺激、インセンティブを与えるよう世界中の指導者達に要望する(要旨)」。アルノー・ゴードルJCI会頭は「世界60カ国以上を回りビジネス・ネットワーク



パリ宣言、王子議長（'94）

の構築を訴えてきたが、この会議はその集大成となる。神戸に向けて、GO FOR GOLD!が加速された」と締め括った。

地球市民が銀河を翔ける 〈盛岡全国大会〉

9月28～10月2日、第43回全国会員大会は盛岡で「地球のやさしさに出会うとき—地球市民が銀河を翔ける」のスローガンのもと開催された。本大会では、まず日本JCの運営上、極めて重要な意思決定が行なわれたことを記しておかねばなるまい。

財政再建も自己改革

9月30日、台風が吹き荒れる中、第95回臨時総会が開かれ、「会費の見直し」と「共済会の設立」が審議された。両案とも日本JC財政の危機的状況を乗り切る施策で、財政再建も自己改革の一つとして取り上げられた。質問、意見が続出し、十分な討議の結果、両案とも可決された。

結果は会費値上げ（2倍）賛成2959票、反対176、棄権28。共済会賛成2808票、反対324、棄権46。次年度から実施されるが、会費の改訂は実に22年ぶりのことであった。

TOYPは全盲の石川准さん

TOYP大賞授賞記念式典は、盛岡市民の方々にも素晴らしい若者達を知って頂きたいという趣旨に基づき都南会館で市内の中高生や市民約500名を迎え

て実施された。大賞には105名の推薦から10名が選ばれ、グランプリ・科学技術庁長官賞は石川准さんに輝いた。15歳で失明し、20歳で全盲では初めて東京大学に合格。自分が開発したプログラムでコンピュータを駆使して新聞を読むほか、翻訳作業を行っている。石川さんは、全盲をハンデとしている風は全くない。必要なのは意志なのだ、ということを教えてくれる。

古川JC、 緊急医療センターでグランプリ

さて、注目のアワード。盛岡グランドホテル・ウェルカムプラザは、午後9時の開会を待たずして満席だ。やがて、申請事業を写真で紹介するイメージ映像がスタート。規定部門66、自由部門22の事業から、規定部門7、自由部門10の事業が優秀賞を受賞した。

グランプリは、本年度から申請した全事業から選ばれることになった。注目の中、準グランプリは茅ヶ崎JC、士別JCに、そしてグランプリは古川JC、と発表された。

茅ヶ崎JCの準グランプリ、モデルビーチ事業（ほのほの共和国）は、安全にゆったりとくつろげる海浜づくりを目指し、市民・行政・企業が一体になって行なった美化運動で、本年で5年目になる継続事業。士別JCのサフォーク運動は、サフォークという羊を士別のコミュニティー・アイデンティティーと位置づけ、これを核としたまちづくりを行なった。新しい士



古川JC 緊急医療センター設置運動でグランプリ（'94）

別文化の創造へと拡大している。

古川JCのグランプリ事業は、緊急医療センター設置運動である。安心して暮らせるまちづくりを目指し、緊急医療センターの必要性を提言した。地域住民を巻き込んだ署名運動で、地方都市として全国に先駆ける運動を展開している。地方の命の不公平を解決するのが目標というテーマ設定は、まさに壮絶というほかない。成功を祈りたい。

自己改革は生き方の問題

2日、秋晴れの岩手産業文化センターで開かれた大会式典には、常陸宮・同妃両殿下がご臨席になり「真の国際人としての自覚をもち、地球市民として世界の繁栄と平和に貢献することは青年に課せられた大きな役割である」とのお言葉があった。

小原会頭は「JCの自己改革は組織や仕組みの変革ではなく、一人ひとりの心の持ちよう、生き方を変えることであり、そこから地域・日本・世界を変えることができるのだ」と1万5000人の参会者に訴えた。

第44代会頭に選任された山本潤副会頭(伊丹)にプレジデントリーフは伝達され、山本95年度会頭予定者は「これからは、それぞれの個の良さを発揮させながら、地球社会全体・全人類的利益とのハーモニーを図るバランス感覚を大切にする新しい地球市民の時代である。この意識をもって、次年度の事業を進めていきたい」とアピールした。

どんな志を抱いたかに注目を

式典の最後を飾る卒業式は、1500名が登壇。卒業スピーチは一卒業生から選ばれた異例の木村高寛(二ツ井)がマイクを取った。「我々29年生まれの午年には、サラブレッドもいればダバもいる。それぞれ己の信念のもと、明るい豊かな国のため力の限り走り続けてきた。もし、君達が我々のことを思い出す時、何をやったかではなく、どんな志を抱き何を見つめて走っていたかを考えてほしい」。素晴らしいスピーチではないか。そして、卒業生達は、それぞれの思いを胸に「いい日旅立ち」を大合唱し、JCライブにピリオドを打った。

本大会では、後世に残る事業の一つとして「地球市民の森」事業を実施した。盛岡市外山森林公園内の1ヘクタールの区域に、ブナの木1000本を植樹した。また、盛岡JCが全国大会を機にスタートさせた「アイ・腎バンク」登録事業は、大会終了までに全国から1000名を超える登録があった。

王子英、神戸世界会議でJCI会頭に当選

「1にOJI、2にHIGUCHI、3にMOTTAINAI、と言いつけて、海外のメンバーと握手して下さい」。小原会頭は、JCI世界会議・神戸大会の本部団結団式で、こうスピーチした。

このJCI設立50周年という記念すべき神戸大会には、過去最高の1万5500名、海外からは2500名が参加し、グローバル・コミュニケーションのテーマどおり、様々な交流が繰り広げられた。

11月17日午後6時からの総会で、注目の選挙が行なわれた。会頭選挙には王子とアイルランドのレティ・ベーカーが立候補していたが、ベーカーの棄権により王子が圧倒的な支持を得て当選した。日本からの会頭は、81年の長尾源一(東京)以来14年振り、70年の前田博(東京)以来25年、3人目である。

王子は「横浜JC他のメンバーに感謝します。来年は、子供の将来にスポットを当てた活動をしたい。今から一緒に一歩前へ進みましょう」と抱負を語った。「王子を補佐したい」と副会頭に立候補した樋口信治(大阪)も、最高票で当選した。

ロシアJC、JCIに正式加盟

この総会では、参加者にとって忘れることのできない重要事項があった。議長のゴデル会頭は「本日、ここに歴史的瞬間を迎えました。ロシアJCの皆さん、JCファミリーにようこそ!」と、声高く歓迎の意を表したのだ。旧東側諸国で初めて、ロシアJCがJCIに正式加盟を果たしたのだ。全員総立ちの中、ロシアの旗が悠々と翻った。国境を越え、人種を越えた友情の、更なる広がりを予感させる一瞬であった。

MOTTAINAI宝探し賞

日時は前後するが、16日の総会では、MOTTAINAI運動の実践例が報告された。モンゴルJCでは、42名のメンバーが学校で直接説明をするなど普及に努めている、という発表もあった。そして、18日の総会では「MOTTAINAIアイデア宝探しコンテスト」の表彰式が行なわれた。

審査委員長のゴデル会頭夫人が発表したグランプリは、日本の大学に留学しているリトアニア人、クディーズ・アルギダスさんに決まった。約4500のアイデアから選ばれたクディーズさんには、記念の楯と1万ドルのエアチケット（日本航空提供）が贈呈された。

テーマは、「ゆとりある時間を過ごし、家族の絆を取り戻そう」だ。趣旨は「多くの人が家庭を犠牲に、夜遅くまで働いている。しかし、そういう仕事はそれほど効率的ではない。残業を止めれば、暖房費や電気代が節約できるし、家庭で両親揃って家族の絆を取り戻すことができる」と。

2年連続、最優秀NOM賞を受賞

アワード・セレモニーは午後5時、国際展示場2号館でスタート。会場の後部座席は応援団が陣取



JCI世界会議神戸（'94）
王子JCI会頭当選

る。どの顔にも期待と不安が入り混じり、同通イヤホンに聞き耳をたてる。

第Ⅲ部門LOM賞の日本の一番手は、環境改善賞の広島だった。1000人以上が参加してゴミを拾い、分別し、アルミ缶を換金して植樹するという事業。しばらく途絶えた後、骨髄バンク普及啓蒙活動が評価されて旭川にコール。続いて横浜。セブJCを通じてフィリピンの子供達に斜視を治す手術費用や眼鏡、書籍等を寄贈した事業。続いて岐阜が、国際アカデミーの参加者と地元高校生の交流を図った事業に国際関係賞。最後は泉、ラオスでの小学校建設が評価され国際関係賞に輝いた。

第Ⅱ部門NOM賞では、日本が最優秀出版賞を獲得。「50億、JC PRESS」が世界で評価された。そして、最後の賞は、昨年から新設されたNOM賞だ。「最優秀NOM賞を、この神戸大会のホスト国でもある日本JCに」という発表と同時に大歓声が上がり、万雷の拍手と共に場内は総立ちとなった。2年連続の受賞だ。ゴデル会頭から日本JC正副会頭に、「日本JCには各エリア会議においても、大変に協力して頂きました」と地球儀が贈られた。

アワード・セレモニーの後、1995年度JCI会頭に就任した王子英の就任式が行なわれ、世界会議は全日程を終了した。

翌日、本部団解団式で小原会頭は「全て、目的を達成しました。海外からの参加者からも大きな評価を貰っています。円高の厳しい条件のもと、実行委員会は本当に良くやってくれました。この会期中に味わった気持ちを忘れることなく、明日からの活動に取り組みましょう」と、実行委員会メンバーの労をねぎらった。